



僕のこと

僕が、Gと出会ったのは、ある晴れた春の日のことだった。

その日は、朝から家の手伝いをして、家畜の世話や父さんに言いつけられている裏の納屋の掃除なんかをして過ごした。お昼頃、母さんが作る昼食のいい匂いにつられて家に戻ると、一番下の妹が大泣きしていた。今年生まれたばかりの妹は、産婆の話によると、僕らの兄弟の中で一番大きな体で生まれてきたのだそうだ。だから、人一倍お腹が空しく、人一倍たくさん食べなければならない。僕の下の子はもう十分大きかったけれど、まだまだ食べ物の優先順位が高いくらいには小さくて、だから必然的に、僕の食事の量が少しだけ減らされるのだった。僕よりも先に生まれた姉のグレースは、病気になった時に食べ物が足りなくて死んでしまったのだ、僕はあまり覚えていないけれど、何日も何日もベッドの中で眠っていて、そのまま口を利かなくなってしまった。だから、その代わりに妹はよく食べる。母さんが、つらそうな顔をしてあやしながら乳をやるのを横目に身ながら、昼食を手早く済ませた。

だって、午後からは遊びに行ってもいいと、父さんが言ったから。着いていきたいとせがむ弟を置き去りにして、僕は東のグレッグフィールドの丘を目指して歩き出したのだった。

僕の家、シェールの丘から東のセントルイスリバーの間に広がっている、広い農場がグレッグフィールドと呼ばれるようになったのは、昔大地主だったグレッグ氏が最初に手に入れた土地だからなのだそうだ。グレッグ氏は、この農場のなだらかな急流を縫う道にポプラ並木を作り、小川が流れる森はそのままにしておいて、平野の広がる場所にたくさんの牛を放し飼いにしていたのだ。低い谷間の奥には、立派な屋敷を作って家族と一緒に暮らした。以来、代々グレッグフィールドの土地は、グレッグ氏の子孫が相続してきた。シェールの丘だって、本当ならグレッグ氏の一族の土地なのだ、近くの村の人々が暮らす土地のほとんどが、彼らの持ち主で、それは昔も今も代わりはない。

グレッグフィールドの屋敷には今、グレッグ氏が死んでから4番目のご当主が暮らしている。死神ばばあだ。父さんはその呼び名を嫌って、決して口にするとすると言うけれど、心の中ではいつだって、死神ばばあなのだ。グレッグフィールドの女主人は、旦那様を戦争で亡くし、一人娘も母親を捨ててどこかへ行ってしまったのだそうだ。前に、父さんにくっついて村へ行った時、お酒と泥の匂いをさせた農夫の男たちと一緒に話しているのを聞いたことがある。グレッグフィールドの貴婦人と呼ばれていた美しい娘は、都会へ出て行って、どこの人とも知れない男と結婚して、大陸に渡ってしまってしまったのだ。以来、落胆しきった死神ばばあは、毎日真っ黒な喪服を着て、長年女中をしている年かきの女性と一緒にひっそりと暮らしている。その姿を見ることはめったにない。毎日屋敷は薄暗く、庭は手入れもされないから荒れ放題。伸びた蔓が煉瓦の壁を多い隠し、昔は綺麗なだった白い屋根も、今では枯れ葉まみれなのだった。

まるでお化け屋敷のような屋敷には決して近づかない。見つかったら大声で怒鳴られるからだ。出てお行き！小生意気な子童め！今度姿を現したら箒で叩くからね！女中女のぼろぼろの歯がかさかさなる音が恐ろしくて、一度追い払われて以来決して近づかなくなった。

代わりに、今の僕の遊び場はお屋敷へと続いていく道から外れ、細い忘れられた獣道をかき分けた先にある森だった。大昔に整備されたらしい名残だけを残して、ほとんど自然の姿に戻ってしまった森の中を歩き回り、珍しいものを探したり、秘密の隠れ場所を作ったり、友達など一人もいないから、いつだって一人だったけれど、森の中には小さな動物がたくさんいたし、小鳥のさえずりも聞こえるから寂しくはなかった。時々、ほんの少しだけ、誰かとおしゃべりをして、一緒に駆け回りたと思ったけれど、それ以外は別に一人でも平気だった。

Gのこと

ある晴れた春の日の午後。僕は、グレッグフィールドの森の中で、僕の人生で一番素敵なものに出会ったのだ。

茂みをかき分けて、森の中の開けた場所に出ると、僕はわっと心が躍る気分を味わった。空き地には、大きな樹が一本立っていて、その生い茂った枝の間に、木板で作られた声を作られていた。高さは、僕の家の方の2階くらい。木製の梯子まであった。ずいぶん古いようで、ところどころ穴があいているように見えたけれど、しっかりとした作りの樹の上の小屋は、僕の心を躍らせるには十分だった。もう長い間、誰も訪れたことのない森の中。忘れ去られた場所に取り残された小屋を独占する者はいない。そうだ。最初に見つけた僕以外には、誰もだ。そう考えた僕は、迷いなく小屋に近づいていった。

そこに彼はいたのだ。G。本当の名前は知らない少年。彼は、樹の前の草の上に寝ていたのだ。両手と両足を広げて、顔は空へと向けていた。目は閉じていたので、一瞬死体かと思った。もしかして、小屋から落ちたのだろうか。一体いつから彼はここにいたのだろうか。僕が見つかるまでずっと？誰にも気づかれずに、ここで死んでしまったのだろうか？恐る恐る近づいて、ぐるりと少年の周りを回ってみると、どうやら死んでいないらしいことが分かった。彼の胸は鼓動し、肩で息をしているのが分かったからだ。眠っているのだろうか？金色の髪が太陽を反射してキラキラと光ってみる。僕の栗毛とは全然違う。まるで、街に住んでいる貴族みたいだった。洋服だって綺麗だったし、何度も着古した僕のものとは違う。でも、グレッグフィールドにそんな少年は住んでいないはずだ。近くの村にだって金色の髪の子は見たことがなかった。一体どこから来たのだろうか。

「ねえ、何してるの？」

僕が問いかけると、少年はぴくりと鼻先を動かした。目を開けようとはしなかったが、驚く様子もなかったから、僕の気配を感じていたのかも知れない。

「重力と話してるんだ」

少年はそう答えた。

「重力？」

「そうさ。おまえも感じるだろう？足の裏がじくじくして引っ張られてるみたいに」

「僕には分からないよ」

「そうかい？でも、重力は重苦しい声で言っているよ」

ぱっと少年は目を開けた。驚くほど透き通った榛色の瞳が、僕を見る。

「おまえたちを一生放さない。ずっと地上に縛り付けておいてやるってさ」

「君・・・だれ？」

少年は顔を上げると、何か物珍しい者を見るように僕のくしゃくしゃの頭の前から、昔兄さんが履いていた穴のあいた靴までを順番にゆっくりと見た。僕は、叔父さんの家に養子に行った兄さんとは全然違うから、なんとなく恥ずかしくて1歩後ろに下がった。彼は、そんな僕を逃がさないと言うように立ち上がると、びくびくする僕の前に立つ。ほんの少しだけ彼の方が背が高かった。けれど、大きく見上げるほどでもない。

「おまえこそ。名前は？どこから来た？」

「ぼ、僕は…。シェールの丘に住んでる。名前は、アーサー」

「アーサー？アーティ・・・アーチー。魔術師マーリンが飼ってるフクロウと同じ名前だ。君は”子フクロウ”か！」

「違うよ！僕はフクロウなんかじゃない！」

「次はおまえの番。僕の名前を付けてもいいよ」

「は？」

訳が分からず、首を傾げて見せるけれど、彼はほら早くとせつつくように促す。名前を付けろと言われてたって、いきなり思いつくはずがない。思わず目を丸くして、今すぐに逃げ出したい気分になったけれど、期待いっぱい輝く彼の目を見上げたら、足が思うように動かなくなってしまった。そうだ。ちょうど、彼の言葉通り。重力に縛り付けられているみたいに。

よくよく考えて、もう一度の彼の名前を見て、最初に思いついたのは、一文字だけだった。

「G。・・・君の名前」

「G？どういう意味だい？」

「GravityのG。君は、重力が好きみたいだから」

「ああ！それは名案だ！」

何が名案なのか。少年はケタケタと笑いながら喜んだ。僕が新しく付けた彼の新しい名前。Gは、僕が彼にあげた名前になった。変な話だけれど、彼はこれからずっとGのままだったし、結局のところ、本当の名前を知ることはできなかった。僕は、ただただ、この不思議な少年の喜び様を見ながら、変な奴だなと思っただけだった。変な奴。彼は不思議な少年だった。けれど、僕にとっては唯一の友達となった。この奇妙な出会いの後、ずっと、Gと僕は友達になったのだ。

その日から毎日、Gと出会った樹の家の空き地へと行った。彼はいつも樹の家の中において、色々なことを考えている。たとえば、どうやったら鳥のように飛べるかとか、どうやったら木々を渡るリスのようにすばしっこくなれるかとか。雨雲をいっぱい集めて、日光浴している人々の頭の上に雨を降らせたら愉快だろうとか。大地の土の下の下のその下にはきっと、逆さまの世界があるのだとか。人は死んだら空の上へ行くのだろうか。とか、そんなことばかり考えていた。

「G。遊びに来たよ」

「やあ。僕の小フクロウ。今日は何をして遊ぼうか？」

「その呼び方やめてくれないかな。僕のもって…。僕は君のものじゃないよ」

「フクロウはいつだって魔術師のものだ」

「君って魔術師？」

「ある意味ではね」

そう言って、彼はにやりと笑う。前に一度、魔法を見せてほしいと言ったことがあった。すると、彼はイタズラっぽい顔で、魔法にはとてもとても長い時間がかかるから無理だといった。「いつか、君が忘れてしまった頃にふいに現れる。僕はそういう魔法しか使えないのさ」

そんな屁理屈だと思ったけれど、彼の言葉を証明できる方法は思いつかなかったから、僕はうなずくしかなかった。だってきっと、彼のことを忘れることなんてないと思ったのだ。それくらい、彼と一緒にいるのは楽しかった。

僕が、グレッグフィールドの隅から隅まで知っているように、Gもまた、グレッグフィールドの影や岩の後ろや、木の付け根の奥の奥まで知り尽くしていた。

森を抜けたその先にある、平野の中の小さなため池には魚がたくさんいる。自作の小枝の釣り竿に僕が父さんの作業小屋から拝借してきた糸を括り付けて釣りをした。Gがどこから持ってくるかわからないけれど、鋭く尖った針金を持っていて、指先でうまくねじ曲げて釣り針にし、餌は僕の昼食のハムとか、ソーセージとかをこっそりポケットに入れて持ってくると、ただそれだけで魚は結構採れるのだった。もしかして、Gが何かの力で引き寄せているのではないかと思うほど、水面の奥に魚の気配を感じた。僕一人ではそんなに捕まえられない。次から次へと魚は釣り針に食いつき、懸命に体をくねらせながら引き上げられる。大きさは色々だ。太い奴もいれば、細長いやつもいた。それほど大きな池ではなかったのに、一体魚たちはどこに住んでいるのだろうか。

「こいつらは、食べても美味しそうじゃないな」

Gはそう言って、捕った魚をすべて元の池に返してしまう。哀れそうな目をする魚の湿った水玉のような瞳をのぞき込み、首を傾げながら彼は、不思議そうに問いかけるのだ。おまえたちはどうして水の中にいるんだ？

「魚なんだから、水の中にいたってあたりまえだよ」

「誰がそう決めたんだろう。神様？」

「知らないよ」

「水の外の世界を知らないおまえたちは哀れだなあ」

それは、僕らも同じじゃないか。僕らは魚ではないから水の中の世界なんて知らない。そういうものだ。僕らは鳥の世界がわからないし、大人の世界もわからない。

「僕は、すべてを知りたいんだ。全部。全部。知りたいんだよ」

僕は小さくため息をついたけれど、Gはまるっきり気にしていないようだった。

2人で捕った魚のうち、大きめのもの2匹を残して、すべて池に返すともうすっかり日は暮れていた。2匹の魚は僕

が母さんへの土産に持って返るつもりだったのだけれど、Gは最後まで死んだ魚を哀れんだ。おかしい奴だと思ったけれど、僕は何も言わなかった。

掘らず穴

ある時、Gは「掘らず穴」のことを教えてくれた。それは、グレッグフィールド屋敷へと続くポプラ並木の小道と平行して流れている小川のほとりにある赤土の中の穴だった。その場所だけが、土手が高くなっていて小道の方からは見えないのだが、水の少ない春の間だけ、小川の辺の岩場を伝っていくと掘らず穴が見える。その穴は、子供一人がやっと入れるくらいの薄暗い穴だった。足下は湿っている。夏になると、小道の地下を横切るようにして、反対側の貯水池から水が流れてくるのだと、Gが教えてくれた。

「この穴をくぐり抜けるんだ」

「は？こんな小さな穴を？」

「そうさ。前にやったことがあるんだ」

Gは自信満々に言う。僕は、もう一度掘らず穴の奥をのぞき込みぞっとする不安を感じた。穴の奥は暗く、出口らしいものは全然見えない。入り口こそ広いが、奥へ行けば行くほど穴は狭まっているように見えた。

「無理だよ！こんなところ入り込んだら…外へ出れなくなってしまうよ」

「大丈夫だって！」

「僕はイヤだ」

「どうして？」

「どうしてって…」

「怖い？」

Gは意地悪く笑った。バカにされているんだと思うと、かっと頭に血が上って、頬が熱くなるのが分かる。

「べ、別に怖いわけじゃないよ。でも、危ない場所には行くなって父さんに言われてるし…」

「親父のせいにするなよ。小フクロウちゃん。本当に怖いことなんて知らないだろ？」

「知らないよ！だって、僕たちは子供じゃないか」

「大人になったら、この穴だつてくぐれないだ」

そう言って、Gは僕のことなんて全然見もせず、掘らず穴の中へ入って行ってしまった。僕は、しばらくの間穴の中へと進んでいくGの後ろ姿を眺め、それから嫌々ながら彼の後に付いていくことにした。バカにされたのが気に障ったのもあったが、彼が行けるのに自分が行けないという状況が嫌だったのだと思う。あとに一人だけぼつりと残されて、彼の帰りを待っている？いや。もしかしたら、彼は二度と戻ってはこないかもしれない。そう思ったら、居ても立っても居られなかったのだ。彼だけがなくなってしまうなんて、嫌だった。

最初は前かがみで、次第に天井が引くくなり、四つん這いになった。元々この穴は、貯水湖の水があふれないように自然に土を掘って流れ出した穴だったから、足下は常に湿っていて、指先にぬるりとした感触が伝わってくる。最初は見えていた入り口の光が少しずつ遠ざかり小さくなり、影の中にうっすらと見えていたGの足が見えなくなっていく。

「G？」

「ん？なんだよ」

「出口は見える？」

「いや」

「あとどれくらい？」

「さあ、分からない」

湿った土と水の臭い。Gの姿を見失わないように必死についていこうとするけれど、心は後戻りすることばかりを考えていた。暗くて苦しい。このまま戻れなくなったらどうしよう、という不安に泣き出したい気持ちになる。Gは、彼は平気なのだろうか。迷いなく進み続ける彼についていくのが精一杯だ。見失わないように、見失わないように。

「G？」

名前を呼んでも返事は返ってこなかった。

とたん、雷にでも打たれたかのような衝撃に、体が凍り付いた。彼の姿が見えない。入り口からの光はもう見えず、一寸先には闇しか見えなかった。

「G？どこ？どこにいるの？」

片手を恐る恐る伸ばしてみるけれど、そこに彼の気配はなかった。声も届かない。進み出す勇気が霧のように消え

去り、僕は歯を食いしばるようにして泣いた。

「G！置いていかないでよ！どこにいるの？G」

泥だらけの手で頬を拭くと、なま暖かい感触が肌に残った。穴の中は閉鎖的で、出口が見あたらない。前に進むか、戻るか。選ばなければならないのは分かっているのに、どちらにも踏み出せなかった。何も見えない。逃げ出す手段もない。怖い。怖いよ。怖い。誰か助けてよ。

「泣くなよ。アーサー」

ふいに近くで声が聞こえたような気がして、はっと我に返る。手を伸ばしてみると、優しく握り返す感触が返ってきた。

「こんなところで立ち止まってちゃ出られなくなるよ。ほら、こっち。もう少しで出口だから」

たしかに温かい手だった。Gは僕の手を引っ張りながら前に進み始める。そのしっかりとした足取りに勇気づけられて、おずおずと足を前に出せば、勢いづいたように急ぎ足になった。

かすかに光が見えた。どうして気がつかなかったのだろうか。Gが言った通り、出口にすぐそこにあった。ぼんやりと広がる光が、次第に赤土まみれのトンネルを照らし出し、前を行くGの顔が見えた。

「ほら。もう大丈夫だろ」

どろどろに汚れた体を引きずるようにしてトンネルの中から這い出してみると、そこは干からびた貯め池だった。湿っていて水草が少しだけ残っている。一番深い場所にあげ水が貯まっていて、小さな小魚が動いているのが見えた。

「ここ、どこ？」

「うーん。たぶん、グレッグフィールド屋敷の中かな」

「え？」

震える頼りない足で立ち上がり、貯め池の外へ出てみれば、広い庭を挟んだ向こう側に大きな屋敷が見えた。両方形の壁に囲まれた古典的な邸宅。棟が2つあって、高い方と低い方がある。蔦が生え放題になっていて、あたりの木々の枝が張りだして、屋敷全体を覆い隠そうとしているようだった。屋敷は少しずつ森の中に没していく。まるで幽霊屋敷のようだった。

「まずいよ、G。ここに来ちゃいけなかった。屋敷には近づかない方がいいよ。帰ろうよ」

「どうして？」

「だって、死神ばばあが…」

「大丈夫さ。せっかくだから、見ていこう」

相変わらず後込みする僕には構わず、Gは強引で話を聞いてくれない。彼は何でも先に決めてしまって、僕はただついていだけだった。逃げる間もなく、手を捕まれて彼は歩きだした。本当は怖かったけれど、彼居るのなら大丈夫な気がした。怖くないような気がした。Gと一緒にだから。

グレッグフィールド屋敷

どうしてかは知らないけれど、Gは屋敷の勝手口の場所を知っていた。正面の豪華な入り口なんて気にも止めず、彼はさっさと裏手へと回り込むと、壁伝いに屋敷のキッチンへと続く細い通路を迷いなく歩いていった。どうして、知っているのかと聞きたかったけれど、やめておいた。Gは何でも知っている。それでいいじゃないか。

木で出来た勝手口は、いとも簡単に開いた。不用心だなとGは小声で呟く。うん、たしかに。前に、この屋敷に近づいたときは、女中の老女に追い返されたというのに、そんな乱暴な歓迎は全然なかった。

泥だらけの靴で、キッチンへと入り込む。誰かが料理をしていたような跡があったけれど、そこには誰もいない。Gと2人で、廊下に顔を出してみたけれど、そこにもやっぱり誰もいなかった。

「誰もいないね」

「ああ」

「もう、戻ろうよ。きっと怒られるよ」

「たぶん。テラスにいるんだ」

僕が止めるのも聞かずに、Gは廊下を歩きだした。テラスってなんだ？どうして、そんなこと知ってるんだ？そんな疑問がたくさん湧いて、言葉が喉まで出かかったけれど、それより前に、急ぎ足でGを追いかけていた。

屋敷の中はがらんとしていた。見たとおり、人の気配はない。長い廊下は薄暗くてひんやりしていた。途中で通り過ぎたりリビングには大きな暖炉があった。そこにはたくさんの写真が並べられ、まるで人のいないこの屋敷の住人代わりのようなようだった。白いリネンのクロスの上に、ティーカップが置かれていた。誰かいるんだ。誰か。たぶん、死神ばばあ。

「こっちだ。アーサー」

「G。どうして知ってるの？この屋敷に入ったことあるの？」

「知ってるさ。だってほら……」

言葉の最後を言い終わるよりも前に、Gは廊下を立ち止まった。慌てて足をゆるめる僕の前に、険しい表情のGが見える。どうしたの？と聞くよりも前に、僕とGは蒼白することになった。あの恐ろしい形相の女中が現れたのだ。

「このくそ餓鬼！どこから入って来たんだ！こそ泥の泥棒猫め！さっさと出ておいき！！」

僕らは悲鳴を上げた。老婆の歯がぐわっと開いて、まるで悪夢の入り口みたいな嫌な匂いがした。腰の曲がった鈍そうな足が、がさがさと音を立てて、僕とGを追い立てる。ぎゃーと声を上げて逃げ出すそばで、老婆は箒を振り上げる。

「おやめなさい」

その声は、慌てふためいて逃げだそうとする気の逸った僕の耳にもはっきりと聞こえた。若い女の人の声だと思った。まさか、この屋敷にはそんな人いないと思って、ふとそちらへ目を向ける。リビングの奥へと続く明るい出窓の向こう側。外へ面したテラスには、一人の綺麗な女性がたっていた。

「ですが奥様。勝手に入ってきたんですよ」

「いいじゃないですか。ミセス・グレタ。久方ぶりの客人ですよ。少し話がしたいわ」

僕とGは顔を見合わせた。テラスから現れた人は、妙齢の貴婦人だった。死神ばばあなんてどこにもいなかったのだ。グレッグフィールドの女主人は、銀色の髪をして優しく笑う人だった。

「嬉しいわ。訪ねてきてくれて」

彼女はそう言いながら、温かい紅茶をティーカップへと注いでいく。綺麗なカップは2つ。琥珀色の上で優雅に踊るミルクが幾何学な文様を描いていく。こんな優雅な紅茶をもらったことのなかった僕は、まだ泥で汚れたままの指先を震わせて、それを受け取った。隣に座ったGは、差し出された物をじっと見つめてから、首を横に振る。

紅茶は好きじゃないんだ。彼は、僕の耳元でそう呟いた。

「もう何年も、屋敷を訪ねてくれる人がいなくて。時々やってくる配達人は、ミセス・グレタと顔を合わせるとすぐに逃げてしまうし」

グレッグフィールド屋敷の女主人、ミセス・ジョージアナは、面白そうにくすくすと笑ったけれど、怖い顔してリビングの入り口にたっているミセス・グレタを横目で見たら、笑ってなど居られそうになかった。明らかに、彼女は僕ら

の訪問をよく思っていない。

「でも、門は閉じていたでしょう？いつもは鍵を掛けているのよ。あなたはどこかは入り込んだの？」

「僕らは、掘らず穴の……」

「柵が壊れてるところがあるんだ」

素早い口調のGに遮られた。ミス・ジョージアナの視線が、ずっと流れてGの方へ向けられる。

「子供がくぐるにはちょうどいい穴があって」

「まあ、森の中から入り込んできたの？だから、そんなに汚れてるのね」

どうしてGはトンネルの話を隠しておきたがるのか、不思議に思ったけれど、どちらにしても、危険なトンネルをくぐってきた事実は隠しておいた方が大人たちは安心する。話を合わせるように、僕が頷いて見せると、彼女は困ったように顔を曇らせた。

「最近手入れも行き届かず、森の中には危ない場所があるわ。次にここへ来る時は門から訪ねてらっしゃいな」

ミス・ジョージアナはすっと立ち上がると、細い腰のスカートを揺らして、暖炉の柵へと向かった。そこに置かれている何か小さな物を手に取ると、そのまま戻ってきて、白くやせ細った指先で僕に差し出した。

それは、銀の鎖のついた鍵だった。

「これを差し上げるわ。いつでもいらっしゃい。毎日一人でお茶をするのは退屈なもの。ミス・グレタは口が悪いし、あなたが遊びに来てくれたら、とても嬉しいわ」

僕はおずおずと鍵を受け取った。断る理由もなかったし、かすかにGの様子をうかがえば、彼も嬉しそうだったから、きっとまた遊びに来れるだろうとミス・ジョージアナに告げると、彼女もまた嬉しそうに笑った。

それから、毎日のように僕とGはグレッグフィールドの屋敷へ行った。この世の亡霊だと思いこんでいた女主人は、優しく穏やかでよく笑う人だった。僕らが訪ねていくと、嬉しそうに招き入れてくれて、決まって同じ紅茶を出してくれる。甘くないつんと鼻につく香りがする。何の葉っぱなのかとGが聞くと、裏の温室で育てているハーブを混ぜているのだと、彼女は教えてくれた。

「昔出ていった娘が、異国から送ってくれた手紙に入っていた種なのよ。あの子はもう帰ってこないけれど、せめて、この家の中に居場所を残しておきたくてね」

ミス・ジョージアナは何でも話して聞かせてくれた。きっと今まで話す人がいなかったんだろうなと思いながら、僕らは彼女の話聞いた。特に何も答えなかったけれど、彼女はそれで満足しているようだった。

小さい頃好きだった歌のこと。バラバラになってしまった家族のこと。母親代わりだった乳母のこと。結婚したこと。娘のこと。戦争で死んだ夫のこと。

毎日毎日彼女は話し続けた。飽きるくらいたくさん話。僕やGも話したけれど、彼女にはかなわない。嬉しいことも悲しいこともなんでも話してくれた。

「年をとって、話す相手が少なくなると、人は辛い気持ちが薄れてしまうのね」

彼女はそう言って、少し苦い紅茶を飲んだ。

「今は誰かに何もかも話してしまいたい。どんな些細なことでも、すべて全部吐き出してしまいたいと思うのよ。可笑しな話よね。今までずっと、誰にも何も言わず、この屋敷の中に隠れていたのにね」

友達も居ないし家族も居ない。それはきっととても寂しいことなんだろうな、と僕は思った。僕には、家族もいるし、兄弟もいる。友達のGもいるし、毎日がとても楽しいのに、彼女にはそうやって楽しく話をする相手もいなかったのだろう。ミス・グレタはとても話好きには思えないし、温室のハーブだって話はしてくれないだろう。それなら、僕が話し相手になるよと彼女に言うと、年を取って険しくなった頬の皺をやんわりと綻ばせてくれた。いつだって、遊びに来るよ。きっとまた明日。また明日、あなたに会いに来る。そう言って、黄昏近い夕日の中を僕らは屋敷を出て行った。

「あの人は、ずっと一人なのかな？」

赤く染まる小道をGと2人で歩きながら、ふと僕が問うと、Gは靴の先で小石を蹴った。

「ずっと一人だよ」

「これからもずっと？」

「いや。もう少しだけ」

「どうして？」

僕も同じように小石を蹴り飛ばすと、尖った石が指先にこつんと当たって痛かった。蹴り損ねた石はころころと転がって小道の端へと落ちて見えなくなってしまった。

ふと見ると、Gは立ち止まったお屋敷の方を見ていた。

「あの人、もうすぐ死ぬんだ」

「え？」

「病気なんだよ。もう治らない」

「どうして分かるの？」

Gは僕の方を見た。今まで見たこともないような悲しそうな顔をして、泣きそうな顔をして、Gは分かるんだよ、と答えた。

「重力からは逃げられないんだ。誰も」

翌日。いつものように、樹の小屋の下へGを探しに行ったけれど、なぜだか彼は何処にもいなかった。彼のいない日なんて初めてだった。

ミセス・ジョージアナのこと

その日は、一人で屋敷へ行った。門の鍵は僕が持っているから、一人でだって行けるのだ。最初、Gに持っていてほしいと手渡したのだけれど、彼は、おまえが貰ったものだろう、とって鍵を受け取らなかったのだ。

屋敷へ行くと、出迎えたミセス・グレタがひどく不機嫌そうな顔をして僕を見た。何度来ても、この年老いた女中は苦手だ。怖い顔をして、口を開けば鋭く尖ったものばかりが飛び出す。けれど、その日は何も言わなかった。怖い顔はしていたけれど、無言のまま、僕を知らない部屋へと案内した。二階の一番日当たりのいい静かな部屋。ミセス・ジョージアナの寝室だった。

「あらあら。今日は一人なの？」

天蓋付きの小さなベッドの中に横たわった女主人は、真っ白な紙みたいな顔で小さく笑いながら、手招きした。おずおずと僕が近づいていくと、ベッドのそばのスツールを指さし、座るように促した。

「彼がいないと淋しいわね」

「Gのこと？」

「そう。あの子。彼がいると、とても安心するのだけれど」

「うん。僕もだよ」

昨日、Gが言っていたことを思い出す。あの人もうすぐ死ぬんだ。枯れ木のように細い腕も、血の気のない顔も、昨日までは全然気づいてなかった。ミセス・ジョージアナは病気なのだ。どうして、もっと早くに気づいて上げられなかったのだろう。

「あなた、兄弟はいる？」

病床にあっても、サイドテーブルの上のポットから紅茶を入れてくれようとする彼女を止めて、代わりに僕が紅茶を入れた。温かくつんとする匂いが、部屋の中に広がって、不思議と気持ちが落ち着くようだった。

「上に、兄さんと姉さんがいるけど、今は一緒には住んでないんだ。都会に住んでる叔父さんの家に行ったから。一つ上の姉さんは小さい頃に死んじゃった。今は、弟と生まれたばかりの妹がいるよ」

「家族が多くていいわね」

「父さんと母さんは大変そうだけど」

「あなたがいるから、大丈夫よ」

何の根拠もなく、ミセス・ジョージアナはそう言った。

僕の家は貧乏で、食べていくのがやっとだ。父さんは村の大工の仕事をしているけれど、お金は少ない。子供3人を面倒見るには大変で、時々、夜遅くに母さんと一緒に、兄弟の誰かを叔父さんのところへやろうと話しているのを聞く。叔父さんのところには子供もいないし、街の商人で裕福でもある。田舎のグレッグフィールドに居るよりはずっといい場所で暮らしていける。父さんも母さんもそう考えているようだった。

「私にも兄がいたわ。私が小さい頃に母親が死んでしまったから、兄はよく私の面倒を見てくれて、そんな兄のことが私は好きだった」

「その人は、どうしたの？」

「事故でね。死んでしまったわ。私の家族は、みんな遠くへ行ってしまった。私だけがここに残っているのよ」

「僕はどこにも行かないよ。また、明日もここへ来るよ。きっとGも一緒に」

「そうね。きっと。また明日、あの子ともっと話がしたいし」

それっきり、ミセス・ジョージアナは話さなくなってしまった。目を開けたまま、曇ったガラスの窓の外をぼんやりと眺めていた。緑の蔦に覆われて、視界の悪い外はどんよりと薄暗く、さっきまで青かった空は、灰色に染まり、嫌な風がひゅーひゅーと吹き始めている。

「今夜は嵐ね。アーサー。早くお帰りなさい」

彼女は最後にそう言った。

屋敷からの帰り道。今にも降り出してきそうな雨の気配に、急いで帰ろうと思いながら、ふと思い立ってGの樹の家へと行ってみた。

湿った空気が運んできた陰鬱な影が、森中に広がり、ぞっとするほど肌寒い。春の嵐の予感がする。木々は警告するようにざわざわとなり、小動物や小さな虫たちはこぞって避難は始めている。けれど、Gはそこにいた。最初に彼に会

ったときと同じ。樹の小屋の下の、緑の草の上で寝転がり、灰色の空を見上げていた。

「G？」

僕がのぞき込むと、彼はちらりと僕の方を見て、けれどすぐに興味を失ったかのように視線を逸らした。彼は、灰色の空が好きなのだろうか。

「どうして、今日は屋敷へ行かなかったの？ミセス・ジョージアナが淋しがってたよ」

「いいんだ。どうせ、灰色空じゃ会えない」

「どうしてさ？」

Gはふと右手の指先を空へと向けた。雲の切れ目が何重にも重なり合い、波のように風にさらわれていく。かすかに明るい太陽の幻が横切る時間はもうない。遠くで遠雷が聞こえる。

「僕は、灰色空が嫌いだ。雨の冷たさも、泥の匂いの、なにもかも。嵐がやってきて、ここらいったいを洗い流してしまおう前に、どこかへ行ってしまうたい」

「どこかへ行くの？」

「たぶん、近いうちに」

ショックが一瞬にして駆け抜ける。まるで雷に打たれたみたいに、突っ立ったままGを見下ろす。嵐が来る。嵐が来る。遠くから恐ろしい何かを運んでくる。そして、なにもかも浚っていくんだ。

「どこへ…？」

「分からないけれど」

「嫌だよ。どうして、そんな急に」

「また、明日会えるさ」

「その次は？いつまでここにいるの？」

「さあ」

知らず知らずのうちに、涙が溢れてきた。それとも、ほんの少しだけ降り始めた雨の最初だったのだろうか。ぽつりぽついと、雨が降り始める。

本当は、もっとたくさん、なにか伝えたい言葉があったはずなのに、さようならとか、元気でとか、ばあつと木々を揺らして吹いた風が、なにもかもをどこかへ吹き飛ばしてしまったようだった。僕は、弾かれたかのように踵を返すと、その場所から逃げるみたいに走った。嵐にせき立てられる。走って走って、途中で転んで、それでも走って家へ帰った。背中に雨の粒がぽつぽつと落ちてくる。まるで、背中を叩かれているようだった。けれど、振り返りたくなかった。

僕は、嵐が来るよりも前に家へ帰り、くしゃくしゃの顔をどうしたの？と問いかける弟を部屋から追い出して、一人きりで泣いた。埃臭いベッドの中で、嵐が来る、嵐が来ると繰り返した。春の嵐が季節の終わりを告げるのだ。

嵐の夜

父さんに揺り動かされて目を覚ますと、すっかり外は暗くなっていた。薄い壁の向こうで、強い風が打ちつけられるばたばたという音が聞こえる。風に煽られて断続的に襲ってくる横殴りの雨が屋根を叩き、その不規則な音の襲撃に怯えた弟が泣いていた。

「大丈夫か？」

父さんの問いの意味が、僕の涙目に向けられているのか、子供じみた恐怖への危惧なのかよく分からなくて、うんと頷くと、傷だらけの太い腕が僕を促した。

「少し風が落ち着いてきた。納屋の様子を見てきてくれ。俺は、村の方へ行ってくる」

「母さんたちは、大丈夫？」

「うちの中に入れば大丈夫だ。真夜中までには戻るが、それまではおまえが家を守れ」

父さんの言いつけに従い、弟と妹を抱いて落ち着かせている母さんを残して、僕も家を出た。カンテラの頼りない明かりを暴風の中で守りながら、裏手の納屋の様子を見に行くと、建物の中に押し込められている、山羊や鶏や子牛たちが不安げに声を上げていた。父さんの作った納屋が壊れるはずがないけれど、一番奥にある窓の丁番を確認すると、今にも吹き飛びそうになっていた。風が強すぎるのだ。細い針金を持ってきて、窓を固定している間中、家畜の悲鳴のような声は止まなかった。

一瞬、かっと眩しい光が走ったかと思うと、次の瞬間恐ろしい轟音が頭上で閃いた。それが余りに大きな雷鳴だったから、僕は思わず両耳を押さえてうずくまる。家畜たちが暴れた。恐ろしい気持ちは僕だって同じだと心の中でつぶやき、手探りでカンテラを探す。

へっぴり腰のまま、恐る恐る納屋を出る。再び雷鳴。暗い空に、一瞬だけ灰色の光が走り、少し遅れて雷鳴。黒い雲の中を縫うようにして、稲妻が走っていった。一瞬だけ、グレッグフィールド屋敷が見えたような気がした。自分でも気づかないうちに足が震えていて、雨に濡れた体がぶるりと震える。

Gはどうしているだろう。唐突にわき起こったその考えに、胸が焼けるような衝撃が走った。彼はどこに居るだろう。帰る家は？どこかで雨と風を凌いでいるだろうか。彼の家がどこにあるのか僕は知らないし、そこがどんな場所かも知らない。もしかして、まだ樹の小屋にいるのではないだろうか。頼りない小屋の中に入っているのではないだろうか。

「G・・・」

その時始めて気がついたのだ。僕は彼のことを何も知らない。本当の名前も、家族のことも、どこから来て、どこへ行ってしまうのかも。もっとももっとたくさん聞きたいことがあったはずなのに、まだ何も聞いていない。それなのに、僕は彼から逃げ出した。さよならを言うのが嫌で、淋しくて恐ろしくて、ただ彼のそばから逃げたのは僕の方だった。また明日と彼は言ったけれど、本当に明日、彼に会えるだろうか。まだ僕のことを待っていてくれるだろうか。その考えは、まるで毒のように僕の頭の中に広がって行って、もう拭い去れないほど、深いところにまで突き刺さっていた。それはとても苦しい。彼に会えなくなるなんて嫌だって、そう言いたかったのだ。ただそれだけ伝えられればよかったのに、どうして、そう言わなかったのだろう。言えなかったのだろう。さようなら、ありがとう。またいつか。君のこと忘れたくないんだ。本当に、もっと一緒にいたいんだよ。

彼を探しに行こう。決めるよりも早く、僕の足はグレッグフィールドへと向かっていた。

雨足が少しずつ強くなり始め、風は相変わらず強い。頭上に居座った雷雲が時々、襲いかかるかのように雷鳴を轟かせる。

僕は走った。水浸しになって泥だらけの小道をひたすらに。カンテラの火を頼りにしていたけれど、途中からやめてしまった。知らない間に火は消えてしまっていたし、代わりに、途切れることのない雷鳴が行き先を照らし出す。誰もいなかった。ざあざあと耳障りに雨は響くけれど、森は驚くほど静かで、なんの気配もなかった。だれもかれもが、息を潜めて祈っているようだ。嵐が通り過ぎるように？いいや。だれも、死なないように。死神がそっと忍び寄って、親しく愛した誰かの命をその冷たい指先で掬い行ってしまわないように。

そういえば、グレースが死んだときも、嵐の夜だった。僕はとても小さくて、何も覚えていないけれど、遠雷の影に映る、グレースの白い横顔だけはよく覚えている。

足場の悪くなった森へと入り込み、がさがさと音を立てて枝木をかき分ける。もう体中びしょぬれで、服が肌に張り

付いていた。枝が腕にひっかかって強く引っかかれた痛みで声を上げると、森の奥がぼんやりと明るいような木がした。やっぱり、Gはあそこにいたのだ。樹の小屋に。彼を見つけたら、うちへつれて帰ろう。母さんは驚くかもしれないけれど、大切な友達だと説明すればきっとわかってくれると思う。Gだってわかってくれるだろう。僕が言いたい言葉の一つ一つを選んで、一晩掛けて彼に伝えよう。ありがとう。ごめんね。またいつか。君に会えてよかったって。

突然だった。余りに突然で、予想もしていなかったから。僕は一瞬。自分自身が雷に撃たれたのかと思った。かぁと目の前が閃き、まるで閉ざされた門が開かれていくようだった。次に聞こえたのは、この世界が潰れて砕かれるような轟音。僕は、両手で顔を覆い隠したけれど、あまりの衝撃に小さな体は吹き飛ばされていた。軽く、2メートルくらい。木立にぶつかって背中が痛い。轟音のせいで、耳が変になった。恐る恐る目を開けると、目の前に広がっていた小さな空き地は、真っ赤な光に染まっていた。

「ああ・・・」

声が漏れた。知らない間に、僕の体の中のすべてを吐き出すかのようにため息をついた。

雷は、僕の目の前で樹の小屋を直撃したのだった。

ぱりぱりと音を立てて、大樹は破壊され崩れ落ちる。枯れた木材に乗り移った火の子が、雨の中でさえチリチリと燃え始める。

「G？」

声がうまく出てこない。ふらふらと歩きだそうとしたけれど、全然動かない。体中が痛かった。

「G！」

ゆるやかに確実に燃え広がっていく炎。頭上の雷鳴はなおひどく黒々とした雲の間を空へ縫い止めるがごとく、大蛇のように走り回る。

ああ、力が入らない。指先がひどく冷たい。足先の感覚もない。どうしてしまったのだろう。僕は、どうして動けないのだろう。Gはどこへ行ってしまったのだろう。まさか小屋と一緒に崩れてしまったんじゃないだろうか。彼は大丈夫かな？生きてるかな？ここで待っていれば、また明日も来てくれるかな。ぼんやりと薄れていく目の前の炎の光。眠い。眠い。眠い。

がんと大きなドラムを叩くように聞こえる耳の奥で、Gの声を聞いたような気がした。

トンネル

気がつくと、僕は暗いトンネルの中を歩いていた。手にはカンテラを持っていたけれど、火は入っていない。雨も風の音も聞こえない。出口もなければ、入り口も見あたらない。どこかは分からない。けれど、僕は一人で歩いているようだった。

ふと気がつくと、すぐそばに女の子が一緒にいた。金色の髪をふわふわと揺らし、楽しそうに歩く。時々、ちらりと僕の方を見上げて、声を上げた。鈴の音のように可愛い声で女の子は歌を歌っているようだった。そのうちに、その小さな指先が僕の手を握りしめる。小さくて暖かい。僕は、弟と妹のことを思い出しながら、女の子の手を握りしめた。

そして、なぜだか死んだ姉さんのことを思い出した。彼女が死んだとき、僕は小さくて、姉さんは優しくてしっかりしていると思っていたけれど、思えばこの女の子と同じくらいだったのだろう。最初は小さな風邪から始まって、そのうち肺の病気になった。村の医者では手の施しようがなくて、街へ連れていこうとしたけれど春の嵐に阻まれた。そして、姉さんは死んだのだ。

顔も覚えていないけれど、もしもこの子が姉さんならきっと僕を迎えに来てくれたんだろうと思った。だから、彼女の小さな手が引くままに歩き続ける。そっちに出口がある？さあ。もしかしたらもともとずっと暗い場所に行くかもしれないけれど。

「アーサー」

ふいに名前を呼ばれて、反対の腕を捕まれた。かちやりと音を立ててカンテラが落ちる。振り返ると、そこにはGが立っていた。

「G。無事だったんだね。小屋と一緒に雷に撃たれたんじゃないかと思って、心配してたんだ」

「大丈夫だよ」

彼は笑った。少しだけ、悲しそうに。

小さな女の子がぐいぐいと腕を引っ張ろうとするのに気がつくいて、彼女の方を見ると、女の子は泣きそうな顔をしていた。何も言わなかったけれど、両手で僕の腕をつかんで、先へ行こうと促している。

「ジョーやめるんだ。彼を連れていっちゃダメだよ」

Gが言う。

「僕の妹なんだ。まだ小さくて、遊び相手が欲しいんだよ」

「君の妹？」

「そう。母さんは早くに亡くなってね。父さんは仕事人間だから、僕が面倒を見てるんだ」

「君の家族のこと。初めて聞くよ」

「そうだったかな？」

兄のGに手招きされて、ジョーという名前の女の子はしぶしぶながら僕の手を離した。代わりにGのそばに寄ると、彼の手をぎゅっと握りしめる。

「出口はあっちだよ。アーサー。一本道だから、迷うなよ」

そう言って、Gは何もない暗闇の先を指さした。どこに道なんかあるんだろう。そう思っている間に、カンテラを拾い上げた彼は、まるで魔法みたいに火を入れてくれた。青白くゆるやかに燃える綺麗な火だ。

「Gは？」

「僕らは行かないと。ここで、お別れだよ」

「…そう…だよ」

分かっていたはずなのに、いざ突きつけられると喉の奥が焼けるように痛かった。彼に会って、別れを言うために嵐の中を走ったというのに、言葉なんて何一つ、頭に浮かんではこない。涙が溢れ出しそうだった。

「さようなら。アーサー。楽しかったよ、君に会えて」

「僕もだよ。G。ありがとう。ありがとう。僕の大切な友達…さようなら、G。また、いつかどこかで会えるかな？」

「そうだね。いつか、また」

僕たちは、最後に手を握りしめ、さよならと言って肩を抱いた。さようなら、さようなら。またいつか。ありがとう。楽しかったよ。さようなら。さようなら。

名残惜しむ気持ちが胸を締め付ける。苦しくて息がつまりそうだった。ずっと鼻をすすり、なんとか笑って見せると

、Gも笑った。僕は踵を返して、Gが示してくれた道に戻り始める。手にしたカンテラの明かりが、かすかに行く道を教えてくれた。途中でなんだか振り返って、Gと彼の妹が僕とは反対方向へ遠ざかっていくのを見た。きっと遠くへ行ってしまふのだろう。初めて会った時から、留まる場所を知らない渡り鳥みたいだと思っていた。風のように現れて、春の嵐と一緒に去っていったG。

家へ帰ろう。僕は、そう思った。勝手に家を飛び出して来てしまったから、きっと父さんも母さんも心配しているだろう。もしかしたら、まだ探し回っているかもしれない。だから、家へ帰ろう。僕が帰るべき場所へ帰ろう。

さようなら。またいつか。君に会えてよかった、楽しかった。ありがとう、G。ありがとう。ありがとう。さようなら。

Gと僕のこと

次に目を覚ました時、僕は見知らぬ部屋にいた。天井は白いタイル張りで、大きなプロペラが退屈そうにくるくる回っている。ここはどこだろうと考えながら、あたりをきょろきょろと見回していると、綺麗な看護婦さんが近づいてきた。それでやっと病院なんだと気がついた。僕は、街の大きな病院にいたのだ。

母さんが来て、父さんが来た。病院の世話をしてくれた叔父さんが来て、何年かぶりに兄さんと姉さんが見舞いに来てくれた。僕は2週間も眠っていたらしい。

嵐の日の夜。どこかに消えていた僕は、翌朝、掘らず穴の中で見つかったのだそうだ。どうやってそこまで行ったのかは覚えていない。なんど思いだそうとしてみても、眩しい光のことしか思い出せず、あとのことはあの日の暗闇の中に置き去りにしてきてしまったようだった。体中びしょぬれで、震えたままうずくまっているのを村の人が見つけてくれなければ、僕はあのまま死んでいたかもしれない。見つかったとき体中擦り傷だらけで、しかもひどい熱があったそうだ。グレースと同じ肺の病気だと思う。何日も高熱が続いて、このまま目を覚まさないまま放っておけば死んでしまうと思った両親は、僕を連れて汽車に乗り、叔父さんのところまで来たのだった。

「よかった。あなたが生きていて、本当に」

泣きながら言う母さんの腕に抱きしめられて、なんだかぼんやりとしていたまま、僕は夢のことを考えていた。暗闇の中をどこまでも歩く夢。そして、Gのこと。

「母さん。僕、友達に会ったんだ。夢の中で。彼が僕を助けてくれたんだよ。きっと」

僕は、父さんと母さんにGのことを話した。初めて彼のことを話したのだと思う。グレッグフィールドの森の中で出会ったことも。一緒に遊んで冒険したことも。嵐の夜に彼に会ったことも。

彼はどこから来たのだろうか。どこに住んでいたの？そんな男の子知ってる？村の子だったのかな？それならいいんだけど。だって、樹の小屋は無くなってしまったから。雷に撃たれて、何もかも壊れてしまった。もうきっと彼はあそこにいないだろう。

父さんも母さんも困った顔をして、互いに顔を見合わせていた。2人とも、そんな子供はどこにもいないと言い、夢を見たのではないのかと言う。とても長い間眠っていたから、現実と夢の区別が出来ていないのだと。僕は反論したけれど、結局、受け入れてはもらえなかった。大人たちはそれっきりGのことには興味を示さず、忘れてなさいと言われた。忘れることなんて出来るはずがなかったけれど。

それから数日間、ぼんやりと病院の上で過ごし、父さんが何かの手続きをして、僕の肺の病がよくなった頃。なにもかもが過ぎ去ってしまって、春が終わって夏になる時分。僕は、故郷のグレッグフィールドには戻らず、叔父さんの養子になった。

そして、今

そして今。僕は、グレッグフィールドの広い草原の中を歩いている。

10年ぶりの故郷は、相変わらず静かで素っ気なくて何も無い。こじんまりしていた村は、少し大きくなった。近くに列車の線路が通されたからだ。数年前のことだ。大きな戦争があって、国中に兵隊を移送するために作られた線路は、今では旅人の足になっている。以前は、この村のそばにも軍隊が駐屯し、グレッグフィールドの屋敷には司令本部が置かれたこともあったそうだ。妹からの手紙で、街の様子はどうかと聞かれる度に、僕は嘘の手紙を書いて送ったものだ。大丈夫だ、心配ないよ。こっちは安全だよ。そっちは？おかしな兵隊に声をかけられるんじゃないぞ。母さんをよろしく。この嫌な戦争が早く終わるといいな。そうした手紙を僕は、防空壕の中で書いたのだ。

叔父さんの養子としてそばで暮らしていた兄は、空軍に志願して士官にまでなった。たくさんの武功を立てて、勲章を受けて、誇り高く空の上で死んでしまった。骨の欠片さえ帰ってきていない。美人な姉さんは、陸軍人と結婚して2人の子供と暮らしている。義理の兄は運が良く、片耳の聴力を失っただけ帰ってきたのだ。姉さんは大泣きして、小さな双子の甥っ子を抱きしめていた。あんな風に泣く女の人を僕は始めてみたような気がする。

僕は、叔父さんのお金で勉強させてもらい、医学生になっていた。けれど、戦争が始まって、兵隊になるくらいならと軍医の道を選んだ。これからいざ戦地へと派遣されるという時に、まるで大雨がぴたりと止むように戦争はあっけなく終わってしまった。それから病気の叔父さんを世話を3年。気がつけば彼の唯一の後継者として、商売を引き継ぎ終えた頃に、叔父さんは静かに息を引き取ったのだ。

たくさんの財産と焼け残った家を相続し、僕が最初にしたことは、母さんと妹に手紙を書くことだった。数年前、流行病で父さんが亡くなり、兵隊に志願して出ていった弟も二度と戻らなかった。昔よりは便利になったとはいえ、なにかと不便な田舎町に残された母さんと末の妹が心配で、街へと呼び寄せることにしたのだ。

そして、僕は戻ってきた。10年ぶりに。グレッグフィールドの草原を歩きながら、そこに流れる緑色の空気を胸一杯に吸い込む。少し湿った匂い。懐かしい新緑の香りに、気が狂うのではないかというくらい、鮮明に思いでがいくつも蘇ってくる。丘を下り、長いポプラ並木の小道は、綺麗に舗装されてしまったけれど、昔と変わらなかった。木々が形を変え、森が減り、小川が大きくなった。掘らず穴があった場所は、トンネルを彫り上げて水路が作られ、新しい橋がかかっていた。木の橋から見下ろせば、小さな小魚が楽しそうに泳ぎ回っている。水は澄んでいて、その浅瀬には水草と苔が茂っていた。

グレッグフィールドは、たくさんに区分けされ、どこの誰とも知らない地主の手に渡っていた。かつて、これらの土地を管理していたグレッグ氏の一族は死に絶えてしまったのだと、村の人々は淋しげに教えてくれた。最後の女主人だった、ジョージアナ・グレッグは、ちょうど僕が死にかけた嵐の翌日に、誰にも看取られずに静かに死んだのだと言う。彼女のことをよく知っていたグレッグばあさんも、主人の後を追うようにその年の冬に、一人侘びしく死んでしまった。ジョージアナの娘は戻ってはこなかった。今でもどこか遠い国で生きているのだろう故郷を捨てていった人。どちらにしろ、もう誰も、このグレッグフィールドを省みる人間はいなかった。戦時中、一時的に国の所有物となり、軍隊が駐屯した屋敷は、今でもひっそりとそこに佇んでいた。

僕は、かつてジョージアナからもらった古い門の鍵をつかって、屋敷の敷地の中へと足を踏み入れた。

昔から薄暗くて陰険で、誰かが近づくことを拒むように固く閉ざされていた屋敷は、今や何もかもなくなって何か大切な魂のようなものがぬけ落ちてしまった、抜け殻のようだった。木々は生い茂る、昔のように緑色の蔦が壁を覆い隠していたけれど、すべての窓からはカーテンがはずされ、広い室内に飾られていた家具はなくなっていた。どこかの窓ガラスが割れているのだろうか。傷ついた床にはたくさんの枯れ葉が落ちていて、綺麗な白い壁紙は切り裂かれ剥がれ落ちていた。屋敷は死んでいた。静かに横たわり、抜け殻になったまま、もうどれくらい時を刻んでいるのだろうか。屋敷はもう二度と、息を吹き返すことはないだろう。グレッグフィールドは、もはやグレッグフィールドでなくなってしまったのだ。

まるで子供の遊びみたいに、屋敷の壁に指先を触れさせて、そのままぐるりと一周した。昔はとても背の高かった窓が、今では視線の高さにある。ジョージアナとお茶を飲んだテラスも、きっと彼女が寝ていたベッドもまだ同じ場所にあるだろう。少しだけ苦い紅茶の味を思い出す。優しく幸せそうに、でも淋しそうに笑うあの人の横顔。今でもはっきりと思い出せる。あの人は本当に幸せだったのだろうか。

屋敷の裏手には温室があると聞いていたけれど、それらしいものはすでに無くなっていた。たぶん、軍隊が駐屯して

いる間に取り壊してしまったのだろう。代わりに、防空壕が掘られた後が残っていて、深い草むらの中に、古い鉄くずがいくつも見つかった。

ふと、茂みの方へと目をやると、すっかり自然の中に埋没してしまった小さな門があることに気がついた。近づいてみれば、壊れた鍵がキィキィと音を立てて、僕を迎え入れてくれた。石畳が敷かれた小さな道。野生化した野バラが所々に咲き、突然やってきた人間に驚いた虫たちが、わっと一斉に逃げていく気配が聞こえた。

そこは、墓地だった。

きっと、グレッグの一族が代々埋葬されてきた神聖な場所なのだ。だから、軍隊もここは荒らさなかったのだろう。僕は導かれるがまま、墓地の中をそぞろ歩いた。恐がりだった子供の頃なら、きっと墓地になど入りたがらず、足を震わせて先ほどの門の所から一歩も動かなかったことだろう。きっと幽霊がいるよ。死者たちが目を覚まして、きっと襲いかかってくる。墓地を荒らした者を覚えていて、きっと夜中にやってくるんだ。そして、二度とは目覚めなくなってしまう。

アーサー。

はっと振り返る。彼の声がしたからだ。

「G？」

絞り出すようにしてその名前を呼んだ。不思議なことに、故郷を離れていた10年の間、一度も口にしなかった名前。一度でも口にしてしまったら、時分の中の彼の存在が消えてしまうような気がしたのだ。都会の人々の波の中で彼を見失ってしまったら、もう二度と見つけられないような気がしたのだ。

それなのに、10年ぶりに呼んだその名前は、ずっと僕の舌の上に馴染んで、呼び親しんできたものであるかのように思えた。

「G。君なのか？」

返事はなかった。

その時、ふと目に入った墓石があった。草に覆われ、そこに故人が眠っていることを知らない虫たちが、優しく地と石を這う。僕は墓石に近づいて、そこに記された名前を見た。ジョージアナ・マリア・グレッグ。

隣には、もう一つ小さな墓石があった。ジョージアナのものよりずっと古い。長い時間をかけて、欠けた石の名前は、ジェラルド・トーマス・グレッグとなっていた。

その時初めて、僕は魔法だと思った。彼は言っていたじゃないか。

「いつか、君が忘れてしまった頃にふいに現れる。僕はそういう魔法しか使えないのさ」

僕は、悲しくて淋しくて、けれどとても、とても嬉しくて泣いた。静かな墓地には誰もいなかったから、子供みたいに声をあげて泣いた。小さい頃に置き忘れてきてしまった何かを取り戻したみたいだった。泣いて涙を流して、どこかで詰まっていた枷がはずれて、そしてようやく立ち上がる気力が戻って来たとき、僕はありがとうと呟いた。

「君に会えてよかった。ありがとう。さようなら。きつともう、本当にさようなら。ありがとう。ありがとう。君のことは忘れないよ」

僕は、10年前から大切に持っていたグレッグフィールド屋敷の門の鍵を墓標に捧げて、踵を返した。